

英文法、何を重点的に教えるか

大学入試分析を授業に活かす

佐藤誠司 著

四六判・320頁
本体2,300円＋税

[評者]
石崎陽一



「わかる」「使える」英文法、適任者による再構築の試み

何事も効率化を図るには「選択と集中」が肝要だ。英語を話したり書いたりする力を効率的に身につけるには、発信の即戦力となる文法事項を精選し、その習熟に時間をかける必要がある。この観点から英文法のなかで重点的に教えるべき項目を提案する試みが本書である。

本編は10個の章から成る。時制、助動詞、受動態、仮定法、不定詞、-ing形と-ed形、分詞構文、関係詞、接続詞、比較の順に1章ずつ充当し、それぞれの章で会話や作文での使用頻度の高い文法事項を取り上げる。

取り上げられている重点事項の仕分けは、主に過去のセンター試験の分析結果に基づいて行った。これは「競争的試験として他に類を見ない特殊性・公開の下に行われている」と作成部会の述べるセンター試験において、「出題例がほとんど（または全く）ない文法知識は、学ぶ価値が低い」（p. iv）との考えによるものだ。

仕分けの一例を挙げよう。had it not been for という表現がある。これはセンター試験での出題回数も僅少、会話や作文ではwithoutで代用すればよく、会話

や作文の学習における優先度は低い。そう判断するといった具合である。かくしてアウトプットの観点から覚える価値の高い文法知識が選定され、各章に配置された。

各章は「導入→頻度分析の結果の提示→解説→まとめ」の流れで進む。

解説の項では品詞を基盤とする伝統文法の枠組みを用い、その概念・用語に立脚しつつ、談話文法（情報構造の原則など）、機能文法（依頼表現など）、認知文法（toのコアイメージなど）といった現代言語学の知見を随時援用することでわかり易さを追求。主要辞書の語法注記や英語母語話者へのアンケート調査結果も適宜参照し、正確で実用的なコメントを付す。

本編には付録が2つ添えられている。【付録1】が教室外での学習方法について述べているのは親切だ。「聞く力」「話す力」の養成には教室での指導を家庭学習で補完させることが特に重要だからである。また、【付録2】が組上に載せる大学入試における悪問は、心ある作問者にとって最良の反面教師となるだろう。

佐藤氏は『話すためのやさしい英文法』や『英作文のためのやさしい英文法』等のほか、『アトラス総合英語』『試験に出る「英語の語法・文法」大全』という著書ももつ。英語の実用面にも入試面にも明るい著者の発想と記述が随所に光る本書を読めば、英語教育に携わる者は会話や作文の指導に指針と自信を得られるはずだ。すべての英語教師（とその卵）に勧めたい一書である。

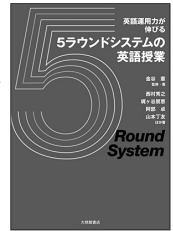
（いしぎき よういち・東京都立日比谷高等学校主任教諭・上智大学講師）

英語運用力が伸びる 5ラウンドシステムの 英語授業

金谷 憲 監修・著

A5判・200頁
本体1,900円＋税

[評者]
杉本義美



ラウンド制指導の本質を考える

この書籍は、横浜市立南高等学校附属中学校で編み出された英語指導システム、5ラウンドシステムの英語授業の実践及びその効果をまとめたものである。

この書籍の書評を書くにあたって、ラウンド制という指導法は何かということをまず定義しておきたい。教科書を繰り返し活用するために、まず多様な listening, reading 活動を通じて内容理解活動を行い、音読練習を通じて英語の内在化を促進し、教科書教材の output 活動（この実践ではリテリング）を基盤にして、speaking, writing 活動を行う。この一連の活動を通して、生徒の英語で表現する能力を高めることを目指す指導法である。つまり教科書を使って、4技能を統合して教える指導法といえる。この指導法はまさに今、日本の中・高の英語指導で求められるものである。

編者の金谷氏は、この5ラウンドシステムにおける「スパイラルな」指導、漆塗りの教授方法を真っ向からとらえて実践している点と、個人ではなく、学校単位で実施している点を高く評価している。試行錯誤の連続の中で作り上げられたシステムであるが、本書にも何度も述べられているよう

に、第二言語習得の認知プロセスを基盤に置き、生徒の授業での反応・様子や、英語学習へ向かう態度に合わせて、このシステムが開発されたことがとても素晴らしい。

評者たちも4技能を統合化するラウンド制に基づく教科書の活用を現場に提唱している。だが、一番の問題は、その学校現場で、生徒の状況や英語の習熟レベルに合わせて、教科書の教材をどう扱うのか(教材の改編も含む)である。指導する教員の資質が大きく問われるのである。だからこそ、1人の教員ではなく、英語科教員全員が協力して、ラウンド制に取り組むことを常に提案している。

このシステムは、教科書を年間通じて4~5回取り扱うので、どの学校でも実施できるとは言い難い。だが、本書の最後に他校の例で工夫されている例(2單元ごとのラウンド制)も紹介されており、英語教員には大いに参考になる。

ラウンド制の詳細な内容も素晴らしいが、何よりも授業の最初の15分間に行う継続した言語活動の取組とそこでのsmall talkによるインタラクションが非常に効果的である。期間において4~5回教科書教材を扱うインターバル学習と様々な表現を取り扱う15分間のスパイラルな活動がうまく連動しているという印象を受ける。

outputにおける正確さや、文法に関する定着が心配ということが本書で触れられているが、output時における言語活動の工夫、例えばdictoglossやsummary writingも取り入れれば、解消される可能性があるだろう。

(すぎもと よしみ・
京都外国語大学教授)

若手英語教師のための お悩み解決 BOOK

阿野幸一・太田 洋・萩原一郎・
増渕素子 著

A5判・176頁
本体1,500円+税

[評者]

白井龍馬



より良い英語教師として 働き続けるための実践知

本書は新人教員のAとBが抱える悩みに阿野・太田・萩原・増渕各先生が助言を与える対談形式だ。扱う「悩み」は「授業について」「人間関係について」「教師としての自信について」の3つに大別できる。「授業について」のアドバイスは、非常に細かなものから授業全体をどう構成していくかについてまで多岐にわたる。例えば第10章「入試対策」では、単調になりがちな問題演習に動きをつけて活動に結びつける技法を紹介する。「リード&アンダーライン」と名付けられた手法は図説付きで丁寧に説明されている。次回の授業ですぐに試せるよう工夫されているのだ。第8章「バランスよく授業に取り入れたい言語活動」では、講義型の授業から脱却できない新人Bの悩みから、「活動を中心に授業をどう組み立てるか」を扱う。本章ではリテリング中心の授業デザイン構築方法が紹介されているが、「授業のbackwardデザイン」という考え方は、あらゆる活動中心授業の構成を考える際に役立つ。さらに「活動あって学びなし」の状態に陥らないために教師が留意すべき点まで言及されており、実践的である。教育現場

をよく知る先生方によって書かれたからこそ、現場で役立つ細かな工夫にまで手が届いている。

生徒や同僚との「人間関係について」の悩みを扱う章もある。第5章「1学期を振り返る視点」では、授業が成立しない際の生徒との関係構築の方法を扱う。その際に萩原先生が実際に用いたワークシートも掲載されており、問題解決のためにとるべき行動が明確に示される。また第6章「夏休み明けのスタートでひと工夫」等では、同僚教員との指導方針の刷り合わせについて書かれている。英語科教員の間では指導法の対立が珍しくなく、この問題は深刻だ。これを認識する著者の先生方は、賢く折り合いをつける方法を随所で教える。

「教師としての自信について」の悩みを扱う場合、著者たちはとても優しく励ましてくれる。コラム「Coffee Break」は、温かい応援の言葉で溢れている。「悩む自分を先生方が支えてくれている」と感じられ、辛い時にも「もう少し頑張ってみよう」と思われる。また時に失敗談を織り交ぜ、教師を長く続けていくための姿勢を伝える。これを読むと少し気が楽になり、「教師としてやっていけるかも」と思うことができるのではないか。

以上の通り、本書には経験豊富な先生方が現場で獲得してきた「実践知」が凝縮されている。若手の悩みが経験不足に起因すると考えるならば、この「実践知」こそがまさに処方箋となりうる。よって本書は、悩みを抱える全ての若手英語科教員の必携書である。

(しらい たつま・
横浜女学院中学校高等学校英語科主任)